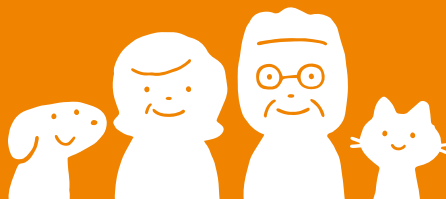


# ジェロントロジ

gerontology

ジェロントロジー（老年学）とは、  
高齢者の生活にかかわる問題を解明し、  
より良い高齢社会をデザインする科学です。  
安藤研究室では、社会老年学、高齢者心理学、  
人と動物の関係学を中心に  
研究をしています。

横浜国立大学  
安藤研究室



## 高齢者とペット： ペットとくらす

横浜国立大学・教授  
**安藤孝敏**  
あんどう・たかとし

近年、多くの犬や猫などの動物が私たちと共に生活するようになり、その呼び方も、ここ数十年で「ペット」から「コパニオン・アニマル」伴侶や仲間としての動物へと変わってきています。この変化は、何よりも私たちと動物の心理的な距離が近くなったことに起因しているようです。動物と長い時間、密接にかかわることにより、様々な恩恵を得て、もはや日々の生活に欠くことができない存在であると実感している人も多でしょう。

### ●中高齢者のペット飼育の実態

ペットフード協会の調査によると、犬猫を飼育している人の年代別割合は、50歳代が犬20・0%、猫11・8%で最も高く、次に60歳代が犬16・4%、猫10・9%で続きます。意外と思われるかもしれませんが、若い年代の人たちよりも、中高齢者の人のほうがペットとの生活を楽しんでいるということなのです。



### ●定年退職後に増す ペットとのかわり

最近では、団塊世代の人たちが定年退職後の生活を充実させたいということで、退職後の計画の中に、ペットの飼育も含まれるようになってきました。特に、ペットを飼育することのメリットを実感している飼育経験者は、退職後はこれまで以上にかわりを増やしたいと考えることも多いようです。また高齢になると、子どもを含めた家族での生活よりも、夫婦での生活の比重が大きくなります。ペットは、夫婦間のコミュニケーションを増

やす潤滑油の役割を果たすというメリットもあり、良好な夫婦関係を維持することにも役立つようです。

### ●ペットと生活することの メリット

高齢者がペットと生活することのメリットは、「心理面」「身体面」「社会面」の三つに区分できます。例えば、「心理面」では、一人暮らしの女性高齢者の場合、ペットを飼っていない人に比べてペットを飼っている人は生きがいを感じているという報告があります。「身体面」では、ペットを飼っている高齢者はペットを飼っていない高齢者に比べて1年間の通院回数が少ないという報告もあります。また「社会面」では、加齢とともに人間関係が希薄になりがちな高齢期の人たちにとっては、ペットをきっかけに人と話すことができ、新たな人間関係をつくれるというメリットもあります。

### ●ペットと生活するうえでの 問題点

飼育されている犬や猫等々も寿命が延びており、高齢の飼い主が高齢の動物の世話をするという「老老介護」が問題点としてあげられます。特に、足腰が弱った大型犬の介護は、高齢の飼い主にとって、体力面はもちろん医療費などの費用面での負担も重くなる場合があります。また、高齢の飼い主が病気で入院したり、要介護状態になり施設へ入所すると、動物を飼い続けることができなくなりま

す。事前に子どもなど頼れる人にペットの飼育について相談するなど、不測の事態に備えておくことよいでしょう。病気などであれば、一時的に動物の世話を依頼できるサービスもありますので、それらを活用することも一つの方法と考えられます。

- 1 「平成25年度 全国犬・猫飼育実態調査」(一般社団法人 ペットフード協会)
  - 2 「ペット飼育支援センター」(特定非営利活動法人 ペッツ・フォー・ライフ・ジャパン)
- \* 『2016年版 くらしの豆知識』(国民生活センター発行)より転載



写真1 新宿区・戸山団地



## 都市にある 限界集落としての 住宅団地

日本大学・助手  
小池高史 こいけ たかし



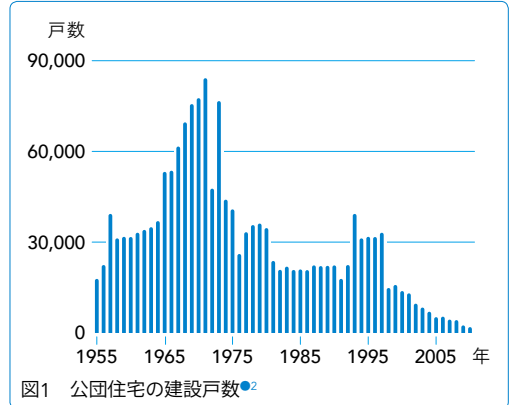
新宿区にある都営住宅「戸山団地」(写真1)が「都会の限界集落」として話題になったのは2008年のことでした。新宿区の社会福祉協議会が実施した調査で、住民の半数以上が高齢者であることが明らかになったのです。

### ●限界集落とは

「限界集落」という言葉は、かつて社会学者の大野晃氏が名付けたもので、「65歳以上の高齢者が集落人口の50%を超え、独居老人世帯が増加し、このため集落の共同活動の機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落」を指します。また、55歳以上の人口が50%を超える集落を、近い将来集落の担い手の確保が難しくなるという意味で「準限界集落」、55歳未満の人口が50%を超える集落を「存続集落」といいます。これらはいずれも、山村の集落を対象に考えられた概念でした。

### ●公団住宅の歴史

最初に挙げた戸山団地などの公営住宅に限らず、近年では公団住宅の高齢化も指摘されています。高度経済成長に伴う都市部の住宅不足を解消するために、日本住宅公団によって都市近郊を中心に多



●団地は限界集落？  
では、住民の半数以上が高齢者となっている都市部の団地を、山村の限界集落と同じように考えることができるでしょうか。やはりそれらには異なる面が多いと思います。団地は主に賃貸の集合住宅ですので、山村の集落よりも転出や転入がしやすく、都市部にあるため若年世代も転入してきやすい場所です。ただそのために、地域のつながりは薄くなってしまいかもかもしれません。高齢化した団地が直面している課題は、地域活動の担い手となる年代の住民がいなくなってしまうことではなく、むしろ地域活動の担い手になろうとする住民がいなくなってしまうことにあるでしょう。

- 1 大野晃 『山村環境社会学序説…現代山村の限界集落化と流域共同管理』 農山漁村文化協会、2005
- 2 木下庸子・植田実(編著) 『いえ 団地 まち…公団住宅設計画史』 住まいの図書館出版局、2014

## ■映画と終活

近頃、「終活」という言葉がメディアで取り上げられるようになりました。デジタル大辞林によれば、終活とは、「延命治療や介護、葬儀、相続などについての希望をまとめ、準備を整えること」。つまり、これからの老いや死に関する様々なことを、自分の老いや死に関する様々なことからについて備えておくことです。

終活に関連するテーマをもつ映画も増えてきたようです。たとえば『エンディングノート』<sup>1</sup>では、余命少ない主人公が自分の死に関する事柄に次々と備えていきます。この映画の影響で、エンディングノート（万が一に備え自分の希望を書き込めるノート）の知名度も上がったと言われることがありますから、映画の力はすごいですね。そこでこのコーナーでは、映画を通して終活について考えてみたいと思います。

第1回目は、『四十九日のレシピ』<sup>2</sup>です。

## ■四十九日のレシピ

熱田家の母・乙美が亡くなり、無気力となった父・良平と、離婚の危機に陥り里帰りした娘の百合子。そんなふたりに、乙美はあるものを残していました。それは、料理や家事のアドバイスをまとめた



CINEMA

映画の中の  
老年学

## 第1回

# 『四十九日のレシピ』

横浜国立大学大学院  
環境情報学府・博士課程後期

木村由香

きむら・ゆか

協力：尾上正幸

(東京葬祭 取締役、

終活・エンディングノートアドバイザー／

終活映画ナビゲーター)



「暮らしのレシピカード」。カードには、自分の四十九日には大宴会をしてほしい、という希望も添えられています。生前、乙美が関わっていた養護施設の若者2人も協力者として加わり、良平と百合子は四十九日の準備に取り組みます。

乙美は、前妻を亡くした良平の再婚相手です。つまり、百合子の養育の母にあたります。子どもがいない女性としての乙美の人生は、一見寂しいものにも思われました。しかし、四十九日の宴会には乙美が関わった養護施設の若者たちがつぎつぎと訪ねてきます。彼らを通し、親族たちは、乙美の人生がいかに豊かであったかを知ります。そんな四十九日を終え、良平や百合子たちは、明日へと力強い一歩を踏み出すのでした。

## ■映画の中にみる終活

現代では、ひとりひとり生き方は多様です。この映画では、子どものいない女性のいきいきとした人生が明らかとなります。「暮らしのレシピカード」は、乙美の自分史兼エンディングノートとも言えるでしょう。そこには、残された者たちが困らないように、という思いが込められています。エンディングノートを書

き残す方も、多くがこのような考えで取り組んでいらっしゃるようです。事務的なことばかりではなく、乙美のように、自分の得意なことを残しておくのも、ひとつの終活の形ですね。

## 終活用語の基礎知識

### 【エンディングノート】

多岐にわたる終活の内容を一冊にまとめて残しておくノート。医療、介護、財産、葬儀、連絡先など、終活に関する様々な項目が用意されており、希望を書き込めるようになっています。事務的な内容だけでなく、大切な人へのメッセージ、自分史、写真、映画のように家族の好きな料理などについて残すことも。本屋さんには沢山の種類が販売されていますし、自治体作成の簡易な無料のものも。時には、自分でオリジナルのエンディングノートを作る方もいらっしゃるようです。



- 1 『エンディングノート』(2011年ピタース・エンド配給)
- 2 『四十九日のレシピ』(2013年ギャガ配給)

## ● 識字の定義と 韓国の国文普及運動

日本語では「識字」、韓国語では「文解」英語では「リテラシー (Literacy)」、とは、簡単にいうと「文字の読み書き能力」に該当する言葉です。UNESCO (1968) の定義では、日常生活に関する簡単な文章が理解できてその読み書きができることを「識字 (Literate)」、読めるが書けないことを「半識字 (Semi-Literate)」であるとしています。識字の意味については韓国の教育学者 **윤건** (1990) は「文化理解と社会的適応の基礎」であると言っています。

1930年に実施された国勢調査によると、当時の非識字率は77.7% (そのうち男性の割合は63.9%、女性の割合は92.0%) と把握されるほど、非常に高い割合を占めていました。その後、政府の5カ年国文普及運動を通して、1958年の非識字率は4.1%まで下がったと報告しています (**황승진**: 1978)。しかし、1970年代に入ってハンゲル (国文) 識字教育は、政府施策や社会的関心から離れてゆき、残された非識字者に関する関心も薄れてきたのです。

## ● 非識字者は 「年齢の高い女性」が多い

1985年度の就学率調査 (한국고용개발원: 1987) によると、女性が男性より教育水準が平均2〜3年低く、特に年齢が高いほどその差が大きいことを把握



# 韓国の高齢社会： なぜ韓国人 女性高齢者は 非識字者になっ たのか 歴史的検討を通して



横浜国立大学大学院  
環境情報学府・博士課程後期  
**李暲娥** い・ぎょんあ

握しました。また農村部の女性 (26.6%) が都市部の女性 (8.6%) より非識字率が高いことがわかりました。無学女性たちが学校に通えなかった理由は、「貧しさ」 (63.2%) に続き「家庭事情」もしくは「男女差別」などがそれぞれ15%を占めています。このような理由で学校に通えなかった女性たちの生涯史を扱った研究 (**최윤정**: 2002) を通して、彼女らの思いを覗くことができます。

**Aさん** 幼いころは、父が「女に学はいらない」と言っていた。娘を学校に行かせると浮気をするって。… (中略) お兄さんたちは全部都市に送って勉強させたから (私は) 悔しかった。でも悔しい一言も言ったことないよ。家では息子が大事だからね。

**Bさん** 農村にいるときは知らなかったけど、都市に出てからはすごく不便だった。

た。何にもできない。旦那が給料をもらってくる銀行に入れて (必要なとき) 引き落とさないといけないんだけど、これ (文字が読めない状況) だと銀行に行ったらちゃんと書けないから。税金払ったり、区役所に行くことも多いし…。

**Cさん** 子供を教えるときが一番辛い。私の人生で自分を情けないと感じたのはそれが始めて。他のお母さんたちは (子供が) 学校に入るまでハンゲル (国文) は終わらせるのに、うちの子はそれができなくてとても辛くて、沢山泣いてたよ。

## ● 非識字者女性高齢者の 社会参加

2010年統計省の調査によると、低学歴・非識字者の割合は60歳以上が42.3%、70歳以上が66.6%、80歳以上が83.7%と集計されています。現在、非

識字者女性たちの一部は、高齢になってやっと社会教育機関を通して文字に出会います。国の政策で全地域に設けられている識字教育機関を通してハンゲルだけではなく、歌や絵、パソコン、英語、漢字などを学ぶ喜びを楽しんでいる人もいます。文字が読めない悔しさから開放され、学校で仲間を作ることができる喜びをこれからも支援し続ける必要があると思います。

- 1 UNESCO 『Literacy 1965-1967』 Paris, 1968
- 2 윤건만 『문해교육의 개념과 기준』 한국문해교육협회 『문해교육연구』 제 1권, 1990
- 3 朝鮮日報 『문자 보급 정도별 인구 文字普及程度別人口』 1934. 12. 22
- 4 황승진 『한국의 사회교육』 한국교육개발원, 교육사회사, 1987
- 5 최윤정 『무학력자의 성인문해학습과정의 관한 생애사적 연구』 서울대학교 대학원 (석사논문), 2002
- 6 성인문해교육지원사업 <http://e-nile.or.kr/site/introduce/programSupport/programSupport.action>

## ジェロントロジー

2015年10月16日発行



### 編集・発行：

横浜国立大学 安藤研究室  
「ジェロントロジー」編集部  
〒240-8501  
神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2  
教育人間科学部 第3研究棟 710号室  
tel & fax: 045-339-3270  
e-mail: andolab.ynu@outlook.jp  
homepage: <http://www.ando-lab.ynu.ac.jp/>